

俯瞰？



# 学術俯瞰講義「学問と人間」(最終回)

- ▶ 反歌として。
- ▶ 「宇宙が人間を押しつぶすことがあるにしても、人間は人間を殺すものよりもはるかに高貴なのであって、それというのも人間は自分が死ぬということ、そして宇宙が人間よりも優位であることを知っているのに、宇宙のほうはそんなことはなにも知らないからである」(パスカル)
- ▶ 人間の本質としての「知ること」
- ▶ ふたつの「知」
  - 1) 「することができる」(身体、暗黙知、技)
  - 2) 「言語化できる」(情報、脱・現在、脱・主体)

# 学問とはどんな「知」なのか？

- ▶ 世界のなかの「知」ではなく、人間にとっての「世界」そのものを、再・構成する「知」、さらには「世界」そのものを、再・創造する「知」。
- ▶ (知は、そのものが絶えざる「創造」なのだ。)
- ▶ 学問は、「普遍的な」人間と相関している。
- ▶ («普遍的な人間」などどこにもいない。「普遍的な人間」の名において語ることの欺瞞？⇒当事者という問題系)
- ▶ (反証可能性。〈誰がやってもそうなる〉という担保。)
- ▶ 学問は、「全体的な」世界と相関している。
- ▶ (⇒「体系」。手順ではない、理念的体系性)

# 「科学」を可能にした表象関係



デューラー 横たわっている女をかく画家 1535年の三版に挿入されたもの



# もうひとつの学問？

- ▶ 「個」はけっして普遍性へ還元できない？
- ▶ 「歴史(文化)」には、普遍性がない。(反証可能性とは別の基準が必要?)⇒
- ▶ 解釈(学) = 演奏 interpretation
- ▶ 固有性・特異性 (文脈の複数性⇒ポリフォニー)
- ▶ 人間の世界への存在の仕方そのものが、解釈(学)的ではないだろうか。
- ▶ 「ことば」というこの未知なるもの。
- ▶ 世界に「真理」があるにしても、「人間」には、「真理」が「ない」。⇒

# それだからこそ

- ▶ その「ない」において、〈学問〉という「真理」の探究が開かれるのである。
- ▶ われわれは、われわれを、再・解釈(演奏)しなければならない。
- ▶ 「歴史」がなにか、誰も知らない。解釈＝演奏においては、知と非知(バタイユ)が戯れる。そこに根源的なエクリチュール(デリダ)の場が開かれる。
- ▶ どのように解釈＝演奏してもいいわけではない。しかし、ただひとつの「正しい」解釈＝演奏があるわけではない。それが、根源的な「対話可能性」を要求する。
- ▶ 「対話」の用意のない者は大学から去れ！

# 学問、この素晴らしきもの

- ▶ 「根源的な対話可能性」が学問は、誰のものでもなく、すべての人のものであること、いや、すべての存在のためのものであることを保証している。
- ▶ 問題は、「すべて」を知ることではない。学問を通じて「すべて」へとつながるということなのだ。
- ▶ ほんとうの学問は、世界と歴史を前にして、権威とも批判とも離れて、静かに「微笑む」ことをゆるすものである(とはいえ、「批判」は決定的に重要な機能でもあるのだが)。そこには、静かな、しかし激しい希望が息づいている。